

片桐洋一
青木賜鶴子
編著

演習
伊勢物語

拾穗抄

大学古典叢書 6

勉誠社

演習 伊勢物語

——拾穗抄——

片桐 洋一 編著
青木 賜鶴子

大学古典叢書 6

勉誠社刊

大学古典叢書 6

演習 伊勢物語―拾穂抄―

定價一八〇〇円

編著者紹介

片桐 洋 一 (かたぎり よういち)

一九三二年 大阪府生まれ

京都大学大学院博士課程単位取得

国文学 (平安時代文学) 専攻

大阪女子大学学長

青木 賜鶴 子 (あおき しづこ)

一九五九年 京都府生まれ

大阪女子大学大学院修士課程修了

国文学 (平安時代文学) 専攻

大阪女子大学助手

昭和六十二年十二月十五日 第一版第一刷発行

編 著 者 片 桐 洋 一

青 木 賜 鶴 子

発 行 者 池 嶋 洋 次

発 行 所 勉 誠 社

〒160 東京都新宿区西新宿四丁目四一番七号

電話 (〇三) 三三三六・一〇四

振替口座東京三一〇二七三九

印刷 東洋印刷株式会社

製本 和田製本工業株式会社

はしがき

すぐれた古典はいろいろな形に変わって再生する。それが古典である。だからすぐれた古典は、本来自由奔放に読まれる宿命をもっているのだが、しかし、その一面、永いあいだ読まれ続けて来た〈読みの伝統〉という重荷を担って今日我々の目の前にあることも事実である。そしてその〈伝統的読み方〉はその作品とともに在るだけではなく、他の文学、他の芸術、ひいては文化・学芸の諸般にまで拡大拡散した形で我々の目の前に伝わっているのである。だから、すぐれた古典は、あらゆる所で、さまざまな形で享受されなければならないが、教室で読む場合はその〈伝統的読みの重さ〉を確かめつつ読むべきだというのが私の持論なのである。

日本の文学史において最も古典と称するにふさわしいのは平安時代の文学である。そしてその中でも特に古典らしい古典といえは「伊勢物語」を第一に掲げるべきであろう。そしてそれだけに、教室においても専門研究者以外の人によって講じられることが多く、さまざまな人によって、さまざまに読まれるという榮譽を担っているのだが、せっかくの古典、その伝統的な重みを感じながら読んでみたいという向きもある。そのような要望にこたえて、この本を作ってみたのである。

中世、特に室町時代の伝統的注釈の集成としての「拾穂抄」を現代の諸注と比べながら読んでいただくのもよし、また頭注欄に加えた設問にトライしながら読んでいただくのもよい。ただし、これらの設問は、本文の行間に解答が見えているような簡単なものもある一方、卒業論文・修士論文のテーマになるような大きなものもある。またその部分の読解にかかわるだけの場合もあれば、「伊勢物語」全体、あるいは物語文学一般に及ぶような場合もある

ことを御承知願っておきたい。

なお、頭注欄の設問と「伊勢物語概説」は片桐洋一が、「拾穂抄」の活字翻刻と「伊勢物語拾穂抄について」は青木賜鶴子が執筆した。

(片桐洋一)

目 次

は し が き

伊勢物語拾穂抄（翻刻）…………… 一

伊勢物語概説…………… 三三

「伊勢物語拾穂抄」について…………… 三九

《付 録》

関 係 系 図

関 係 年 表

和歌初句索引

伊勢物語拾穗抄

※「伊勢物語」を女流歌人伊勢の作とする説は中世に多い。それを拾い出してみよう。

※謙退比興とはどういうことか。また「伊勢物語」から謙退比興の詞と思われる表現を抜き出してみよう。

※業平自記説の根拠を整理してみよう。

※平安時代の文獻で業平自記説の立場にたっているものを探してみよう。

※業平自記説や伊勢筆作説では説明のつかぬ例を「伊勢物語」本文の中から探し出してみよう。

伊勢物語拾穂抄一

いせ物がたりは、伊勢の御の筆作せるゆへに、題号をもかくいへりといへど、猶其根源説々有て決し難きよし、定家卿の御奥書に見ゆ。其故は、此物かたりに謙退比興の詞とて、「哥はよまさりけれど」「もとより哥の事はしらざりければ」「さるうたのきたなげさよ」などいへる事あり。是みな卑下の詞なれば、みづからの書作のしるし也。又、心中の秘密とて、二条后にまいりかよひ、斎宮に逢奉りし事などをしるして其うたあり。これらの事他人の推してしるしがたき事なれば、業平朝臣の自記なるべし。是迄定家卿おく書の趣也。其奥書ハ別ニ奥ニ記ス。其上朱雀院の塗籠に業平の自筆の伊勢物語有しといふ説もあるをや。顕昭法師袖中抄等の説也。しかれども、此物がたりの中に仁和の帝の芹河の行幸の事あり。是なりひらかくれ給ひて後の事。兄の行平。卿の哥をかけり。且又、此物語業平の哥のみにあらず。万葉集の哥など書まじへたる所々あまたあり。其外にも、古哥をかきて作り物語と見ゆる所もあれば、又なりひらの自記のみにはあるべからず。されば、古人の御説にも、まづ業平の自記の双紙有しうへに、伊勢さまの事を書そへて作物語となして、宇多院の後宮、七条のきさき温子の御かたへ奉りしといふに決せり。一条殿の愚見抄、牡丹花の首聞抄、環翠軒の惟清抄、玄旨の閑疑抄等の儀也。

※ 業平のことを「惟清抄」が「閑麗翁」と記しているのは何故か。

※ 「長明無名抄」「玉葉集」「本朝神仙伝」「徒然草」の該当部分を探しだしてみよう。

※ 女流歌人伊勢の御の生涯を概観してみよう。(参考文献―片桐洋一著『日本の作家7 伊勢』新典社刊)

業平は平城天皇の御孫、阿保親王の五男、母君は伊登内親王桓武天皇の御むすめ也。淳和天皇の天長二年に生れ給ひて、同三年に阿保親王表を奉りて、在原朝臣の姓をたまふよし、三代實録に見ゆ。陽成院の元慶元年に右近衛権中將に任ず。在原にて五男なる故、在五中將といへり。惟清抄に閑麗翁といへるも、業平の事也。家は三条坊門の南、高倉の西類にあり。其家作り、ちまき柱といふ物のよし、鴨長明が無明抄に見ゆ。元慶四年五月廿八日に五十六歳にて卒すと三代實録にあり。菩提所は、大和の国石上の在原寺也。玉葉集に「在原寺にて 従三位為子

かたばかり其なごりとてありはらの昔の跡を見るもなつかし」とよめり。本朝の神仙傳には、一旦吉野の河上にのぼりてゆきがたなきよししるせり。賀茂の岩本の宮にいはひて「月をめで花を詠し」と慈鎮の哥、徒然草に有。

伊勢は、伊勢守繼蔭のむすめ、日野の元祖真夏卿の彦孫にて、七条后温子に宮づかへの女房也。宇多帝の寵愛を得て、行明親王をうめり。よりて伊勢の御息所と後撰集・大和物語等にはかけり。皇子を生る人をみやす所といへば也。伊勢の御ともいへり。家は二条東洞院にありしを、能因法師、兼房を車のしりにのせてゆくに、二条東洞院にて、能因俄に下乗して、数町歩行す。兼房あやしみて問ければ、能因云、「伊勢の御の家の跡なり。かの御のうへられし松今にあり。いか

※ 「袋草子」がこのように述べている部分を確認しておこう。

※ ここでいう「知類抄」のあやしき説とはどのようなものを指していると思うか。具体的に確認しておこう。

※ 「愚見抄」の序文を見ると、ここに書かれていることがよくわかる。確認しておこう。

※ 三条西実隆と宗祇が「愚見抄」の「相違を正し」たのはどのような部分だと思うか。一例でも見つけてみよう。

※ この叙述によって「惟清抄」の内容とその注釈史における位置を整理しておこう。

※ このページに出てくる人物について簡単な人物紹介を書いてみよう。

でかのりながら過んや」とて、松のみゆるかきり乗車せずと清輔、朝臣の袋草子にあり。墓は摂津国、能因が旧跡の古曾部といふ所のうへに、伊勢寺とてあり。近き比、永井日向守殿再興し給ひて、林道春法印に其碑をかゝせてたて給へり。

伊勢物語に、むかしは知類抄など古注有て、段々にあやしき説をつけ、此女は誰、この人は何人などしるして、信用しがたき事のみありしを、一条の禅閣御所兼良公号三、古註を見やぶりて、更に新注をなして、愚見抄をあらはし給へり。又、追遙院殿三条西実隆公、二条家の絶たる和哥の道を継て、宗祇と御談合ありて、彼愚見抄の相違を正して、ことに一流をたて給へる、是を當流の説といへり。其追遙院殿の御説をうけて、舟橋三位宗尤号三、惟清抄を述作し給へるに、追遙院殿、家説に符節を合せたるがごとしと奥書せさせ給へり。又、宗祇の講説をきゝて、牡丹花老人久我殿、追遙院御孫号三、追遙院御孫の御説をうけ給ひて、御外祖還翠軒の惟清抄をもとゝし、肖聞等の諸抄の義をとり用ひて、闕疑抄をあらはし給へり。此抄、當流の義をのべて、善つくし美つくして、更にくはふる所なき物なるべし。然ども、今の板行の本、書写のあやまりすくなからず。且又、書落事等あまた侍り。故貞徳老人彼玄旨法印の御説をまのあたりうけ給りて、門人にとき聞せられ侍たり。當流の御説は、尤

※ 玄旨法印の「闕疑抄」の説と「愚見抄」の説が大きく異なる場合を探し出してみよう。

※ 「師説」すなわち貞徳説が「闕疑抄」や「愚見抄」の説に対して独自性を示している場合を探し出してみよう。

※ 同じ定家書写本でも天福本と武田本では本文が異なっている所がある。それを抜き出して、その部分が「拾穂抄」においてはどうかになっているかを調べてみよう。

※ 広本系の阿波国文庫旧蔵本や略本系の本間美術館本では「朱雀院のぬりごめに、紙屋紙にてかきてありし」本……という奥書をもっている。それを確認し、その記述の意味を考えてみよう。

※ 真名本の成立は何時頃か。考えてみよう。

※ 六条宮および後中書王について調べてみよう。

玄々幽微いはんかたなき物から、又愚見抄のおもむきにも、其義をちかくとりて、学者の覚悟なるべき所々ありと、折々は玄旨法印の御ものがたりの事どもありきとて、其初段よりはじめて、両説を双べてとき聞せられ侍し。よりにて闕疑のおもむきに師説をまじへしるして、伊勢物語拾穂抄と名付侍るもの也。

此抄に用る伊勢物語は、京極中納言殿定家卿天福二年正月に書写校合せさせ給ひて、御鍾愛の孫女に為家卿の御娘民部さづけ給ひし本に世に天福本と号、又、武田本とて、定家卿の御自筆にて「合多本二所用捨也。可レ備ニ証本」と御奥書の本あるを、逍遙院殿見合せ給ひて、異なる所々は朱にてわき書し給へる本のうつしを、細川殿玄旨御所持なるを、世に一字をたがへずうつしたへたる本を予所持し侍るを用ひたり。此本、定家卿の勘物を書くはへさせ給ひて、学者の見るにたより有。其本のさま、闕疑等の諸抄に用ひ給へる伊勢物語に聊たがふ所なく、まことに証本なるべければ也。此本玄旨御奥書あり。別に奥にしるせり。

伊勢物語むかしは本々不同とかや。朱雀院のぬりごめに、紙屋がみにて書て有し本は、業平の自筆といへり。又、六条宮の真名の伊勢物語とて、此物かたりを真名に書てかなの点を付られたり。是後中書王眞平親王のと云傳へり。又、狩の使の段を此草紙のはしめにかける本あり。世尊寺の伊行の所為とかや。其

※ 狩の使の段をはじめに書いた本について今迄の研究をまとめてみよう。

外さまぐの異本有て、段々の多少も定らぬを、京極中納言殿多本をあはせて用捨せさせ給ひて證本を定め給ひしより、世々に其本を傳へ、家々に此書を用ひ講せられ侍ると也。

此物語のうたの事 古人の説々

三代實録云、業平ハチイホウカンレイシテハウシウニシテ躰白閑麗放縱不カマハラ拘ホドシテ、畧無ヨクニ才学ニ、克作ヨクサツ三和哥ニ。

古今和哥集序云、在原の業平は、其心あまりて詞たらず。しほめる花の色なくして匂ひのこれるがごとし。

※ 「徹書記物語」「井蛙抄」を見て、ここに述べられていることの主旨を確認しよう。

※ 定家の「近代秀歌」長明の「無名抄」などを見て、ここに述べられていることの主旨を確認しよう。

紀貫之の此論を、業平のうたはいひたらぬ所あるやうに心得るはひか事也。をよそ三十一字の数さたまりたる中に、こゝろを深くふくむる事は、あるはてにをはにこめ、あるは詞づかひをよく心得侍る故也。業平は天性其骨を得たまへる故に、「月やあらぬ」といひ、「わが身一つは」などいひて、其心詞の外にあまり侍る也。後人の哥にも其たぐひおほし。寂蓮法師の「思ひなれにし夕暮のそら」といふに、夕暮の空をは扱もいかにせんと心をこめ徹書記物語の、又俊成卿の「又やみんかたのゝみのゝ」とよみ給へるに、又や見さらんの心も不足なき井蛙抄、定家卿などの類、あげていひがたし。貫之は、詞つよく姿面白きさまをこのみて、餘情妖艶の昧を好み給はざりしより定家卿の近代、秀哥の詞也、業平のうたをか

やうに論し給へるなるべし。

鴨長明（マナシ）無明抄云、和哥の詞は、伊勢物語・後撰の哥の詞をまねぶ云々。

まことに詞書のさま哥にかけて意味ある事、此もの語の詞に過たるはあるまじくこそ。

※「順徳院御記」とは何か。
該当の箇所を確認して、こ
こに述べられていることの
大意をまとめてみよう。

順徳院御記云、伊勢物語は、詞はさしたる事なけれども、尤上手めき、哥殊勝なり。

闕疑抄云、詠哥（カ）大概（ガイ）にも、古今、伊勢物語、後撰、拾遺をまなぶべきよし也。古今の次に伊勢物語をのせて、さて又後撰とあるうへは、尤賞翫すべき事也。されば、二条家三代集傳授にも、此いせ物がたりを始めによむ事なりとあり。

此抄に「一」とつけしは愚見抄の儀也。「肖」は肖聞抄、「清」は惟清抄、「玄」は闕疑抄也。諸抄同儀なる物は、詞すくなきを用侍り。

初段

元服せし事也

むかしおとこうめかうふりして

也 鷹狩也 ゆきける也

ししてかりにいにけり

同胞と書

らすみけり 此男かいまみてけり

一平城の宮也 大和添上郡也

の京かすかのさとにしるよ

也 玄最嫡と書 うつくしき妹也 兄弟也

いとなまめいたる女はら

※「今の世のことなれど、態（ワザト）昔物語のやうに書なし侍り」という認識が「一」すなわち一条禪閣兼良説の根本にある。このよう

な把握が彼の「伊勢物語」注釈の個々に及んでいる例を探してみよう。また「玄」すなわち玄旨法印細川幽斎の「調疑抄」の「伊勢物語」の虚構性についての把握はそれと同じなのか、異なっているのか検討してみよう。

※「うめかうふり」について「一」

の一条禪閣兼良説は「元服説でなく叙爵説をとっているが、これは少数意見である。他に叙爵説をとっている注はあるのか。探してみよう。」

むかしおとこ 玄むかしとよみきりて男とよ

む也。一今の世のことなれど、態昔物語のや

うに書なし侍り。大かたはきのふもけふの昔、

去年は今年の昔になれば、理り背ぬ事なるべ

し。おとこといふは業平の中将をいへり。玄

昔男と業平をいふとは古註の説也。不信用。

此発端の詞尤殊勝也。尚書の序にも「古者伏

犧氏之王天下也」とかくも、昔といふをう

へにかうふらしめたり。源氏物語に「いづれ

の御時にか女御更衣あまたさふらひ給ひけ

る」とおぼえて書と同心也。清同義。愚案

竹取物かたり、宇治拾遺などに「今はむか

し」と書出しも此文勢なるべし。

うめかうふりして 玄禪閣は叙爵の事とあそ

ばせり。然ども御説には、元服の事とす。清

肖同。愚案叙爵とは従五位下になる事也。是

をかうふり給はると哥書にいへり。然ども、

元服の義を用べしとぞ。元服とは、初て冠ぎ

る事也。儀礼の土冠礼に「始加祝 曰、令月

吉日始 加三元服。註元首。元服謂冠」。又、

前漢書昭帝紀「帝加三元服。註師古曰、元首也

冠者首之所着故曰三元服」。玄元服は人の出

身の始め、俗妹の定る所也。業平の一期の間

をかく故に、元服のはじめより、終焉の夕ま

※「女はらからすみけり」とあるが、何故「女はらから」二人という設定がなされていると思うか。

※「古註は紀有常がむすめ兄弟有といふ、不用之」としているが、中世を通じてこの初段の姉妹を紀有常の娘姉妹とする文献は多い。探してみよう。

※「源氏物語」にも「かいまみ」という語は多いと言っている。調べて整理してみよう。

での事を此ものかたりにのせたり。清肖同。

しるよしして。肖奈良に業平の領地の所有

し也。業平は平城の御孫也。南都に領地ある

べき事勿論也。清玄同義。平城天皇ならの京

におはしませし也。

はらからすみけり 肖此兄弟の女、誰ともな

し。玄古註は紀有常がむすめ兄弟有といふ、

不用之。和哥の読人不知の類にすべし。誰

ともなきを其名を誰とあらはして用なき事也。

一清同義。

かいまみてげり 肖垣間見也。たゞ物ごしな

どにほのかに見たる心なるべし。如レ此いへ

は優なるべし。玄源氏などにおほき詞也。日

本紀より出たる詞也。一視其私屏日本紀。視

私屏旧事記。

師おほえなき心也 思ひの外の義也 いとは助字也

おもほえずふるさとにいとほしたなくてありければこゝちまど

ひにけり。おとこのきたりけるかりぎぬのすそをきりてうたを

かきてやる。そのおとこしのぶずりのかりぎぬをなんきたりけ

る

おもほえずふるさとに 一ならの京は其比は

や旧都になれる故、古郷といふ。大同天子の

御哥へ古郷となりにしならの都にも色はかは

らず花咲にけり

いとほしたなくて有ければ 玄はしたなくて

は、よはき物につよくあたるやうの心をいふ。

※「はしたなくて」についてさまざまな説明がなされているが、結論はどうか。まとめてみよう。

※「古今飛鳥井家の聞書」とは何か。調べてみよう。

此古郷のあれたる所に、かゝる風流なる女のあるは、似合ざるやう也。師説はしたなきはつきなく似合しからぬ心也。よはき物につよくあたるも不^{サレ}似合^ニ義也。枕草子云、「はしたなき物へこと人をよぶに我かとしてさし出たる物。へ哀なる事など人のいひてうちなくに、

げにいと哀とはきゝながら、泪のふつと出こぬいとはしたなし」云々。是らもつきなく似合しからぬ儀也。古郷の荒^{アサ}たるに似合しからずなまめける女のあれば、思ひの外にめづらかにて、心のかゝりたるとの儀を、心ちまどひにけりといふ也。

かりぎぬのすそをきりて 肖思ひの切なる跡

也。玄花などの枝も折節なければ、狩衣のすそをきりて、それに哥をむすびつけてやるなるべし。

しのぶずりのかりぎぬ 玄もとは狩装束に摺^{カリシヤク}狩衣^{カサキ}を賞^{シヤウ}ずる也。むかしは奥州信夫^{シノブ}の国府^{コフ}の名物とて、忍^シぶずりをおほく奉りし事也。其狩衣にてこそ有つらめ。一中将の狩衣の紋^{モン}に忍ぶすれるなるべし。哥の詞によらばむらさきの根にてするにや。師陸奥信夫^{リクオシノブ}郡^ノに大なる石二つあり。其おもて平にして戻^{マシ}のやうに紋^{モン}有。それに紫にても藍^{アイ}にても摺^シたる布^ヌを年貢^{ネン}にしたるを、しのぶもちすりとも忍ぶずりともいふ也。古今飛鳥井家の聞書にあり。

新古今
かすが野のわかむらさきのすり衣

しのぶのみだれかぎりしられず

両説あり

となんをひつきていひやりける。つるでおもしろきことゝもや

思ひけん

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆへにたれ

古今

みだれそめにし我ならなくに

といふうたの心ばへなり・むかし人はかくいちはやきみやびを
となす事也
なんしける

天福本定家卿勳物云

※ 河原左大臣の薨年まで定家が勳物に記しているのは何を言いたかったからか。その意図を考えてみよう（次頁参照のこと）。

河原左大臣ノ哥也。左大臣源融・寛平七年八月廿五日薨ハツス七十三
於テ在中将ニ非ニ幾ハクノ先達ニ如何シ

かすがのゝわかむらさきの 玄是は序哥也。

へずよみてやる心也。愚案はより両説の内、

忍ぶのみだれかぎりしられずといはんために、
春日野の若紫の摺衣ガキといへり。此女をほのか
に見てより、我みだれたる思ひの限りカギしられ
ずと也。清同。肖春日野の若紫とは所かすが

御説を註セリ。

つゐでおもしろき事ともやおもひけん 一是

は物語の作者の心也。中将事の次手面白き事

野なれば也。一紫は草の名也。武蔵野にあり。

と思ひて、かゝるすきわざをしけるならしと

春日野にもなどかなからん。

也。師説はより以下の註の心、愚見抄と惟清

となんをひつきていひやりける 一をひつき

・肖聞等の諸抄とは各別也。愚見の御説は、

ては、をつついていひやる也。やがてとりあ

物語の作者此段の註をかけり。奥に「むさし

※ 「つゐでおもしろき事ともやおもひけん」の「おもひけん」の主語を考えつつ諸注の解釈を整理してみよう。